

研究会・シンポジウム報告

2017年2月24日（金） 定例研究会報告

テーマ： 「小田急と自由民権運動からみる日本近現代史」

報告者： 小堀聡氏（名古屋大学大学院経済学研究科准教授）

牧野邦昭氏（摂南大学経済学部准教授）

恒木健太郎所員（本学経済学部准教授）

白井聡氏（京都精華大学人文学部講師）

コメント： 永江雅和所員（本学経済学部教授）

松沢裕作氏（慶応義塾大学経済学部准教授）

時間： 13:00-18:00

場所： サテライトキャンパス スタジオA

参加者数：15名

報告内容概略：

第1部においては、永江所員の著書『小田急沿線の近現代史』（クロスカルチャー出版、2016年）をめぐって、小堀氏が京急沿線の近現代史について、また牧野氏が東急田園都市線の近現代史について小田急との比較を念頭におきつつ報告し、それをもとに永江所員がコメントするかたちで議論が進んだ。鉄道発展と軍事施設（住宅含む）との密接な関係や、自然保護運動との緊張関係、さらには区画整理事業などを通じた地主的ふるまいを行う存在としての鉄道会社の意義、といった論点が浮かび上がった。

第2部においては、松沢氏の著書『自由民権運動——〈デモクラシーの夢と挫折〉』（岩波書店、2016年）をめぐって、恒木が色川大吉『自由民権』（岩波書店、1981年）との対比を行い、白井氏が自身の永続敗戦論との関係を論じたうえで、それをもとに松沢がコメントするかたちで議論が進んだ。色川の主体中心の歴史学に対して際立っている松沢氏の構造中心の歴史叙述が浮き彫りになるとともに、自由民権運動における天皇の影の薄さや、自由民権運動の敗北からみえる〈経済成長≠安楽な暮らし〉という近代の根本問題が、3・11以後の原発神話の崩壊や昨今の皇室をめぐる論争とパラレルに議論されるに至った。

また、五日市憲法の発見が利光鶴松の手記をきっかけとしていることも改めて指摘されるなど、自由民権運動に関わった多摩の人々が、鉄道建設を通じてある種のネットワークを構築していった歴史過程を再認識することができた。

記：専修大学経済学部・恒木健太郎